



大野さんへのQ&A

Q.卒業後はどんなお仕事をしていますか？

A.「講師業をしながら作家活動をしています。」

「大学を卒業してから20年間、既成の美術団体には所属せず個展を中心に作品を発表しています。画廊や美術館といった美術の制度をもたない商業空き店舗での宝塚現代美術展・店に参加してから美術家がそういった場とどう向き合うかについて考えるようになりました。2005年には、アートボランティアグループ「TA\*CO」(宝塚アートコミュニケーション)を立ち上げ、地域での美術展、座談会、子どもたちのワークショップなどを企画しました。地域のイベントなどにも積極的にアートでコミュニケーションしています。基本はすべてボランティアです。」



●「燃焼するもの」(2006年)

81個の練炭を燃焼させてから水で一気に鎮火し、それぞれの表情を作品としたインスタレーション。

Q.作家活動は大変ですか？

A.「やりがいのある仕事です。」

「美術作家活動は自分自身の表現。苦勞だと感じたことはありません。今、自分が生かされているという事に感謝しています。」

Q.どのような学生生活でしたか？

A.「ただひたすら制作に励んでいました…」

「…と申したいところですが、先生を含めいろんな人との出会いを楽しんでいました。自分にとって人生における奇跡的な出会いもありました。在学中の人と人との出会いは自分の中で大きな財産となって蓄積されています。」

Q.これからの目標は何ですか？

A.「小説の映画化に伴い、今度は市民ボランティアの手で自然消滅した『生』を再現できるといいですね。」

「最近のベストセラー小説『阪急電車』に登場する河原に石を積んだ巨大な『生』のオブジェは私が仕掛けた作品ですが、美術には地域を元気づける力があると信じています。自分の美術と社会との関わりを模索していきたいと考えています。」

在学生・高校生に向けて一言 お願いします。

「美術作家(アーティスト)を目指すのであれば、自分の足の裏にくっついているものをひとつひとつ拾うことから始めましょう。在学中にそれを身につけ、多くの出会いを通して、一生涯かけて続ける勇気と根気が必要です。」

「ウー・プロジェクト」(大阪天満橋・ギャ러리 ウー/2004年)

ギャラリの内(室内)と外(室外)をつなぐインスタレーション。黄土を直径12メートルの円弧状に積み重ねた作品。



一見コンクリートの床に着色したりマットを敷いているように見えますが、実は黄土を真っ平らに敷いた作品です。黄土とは「黄砂」で知られるようにとても細かい粒子の砂です。

◆「記憶の中の廃材シリーズ」～記憶の再生をテーマに～

阪神淡路大震災で解体した思い出の詰まった生家の材木を用いて、アートに再生させた作品達です。



●「循環」

(2004年 第5回宝塚現代美術展・店)/宝塚南口駅前サンピオラ3番館・空き店舗内

「自宅を解体した当時の写真を工業和紙にゼロックスで拡大。表面には黄土を塗っている。手前に木の塊に穴を穿ち杉苗木を植えた。廃材(記憶)が土に還りやがて新しい命が芽生える。一緒に写ってるのはわたしと当時5歳の息子(命の循環)です。」



●「記憶のピラミッド」(2010年 個展)/ギャラリーマーヤ



●「記憶の中の廃材一時空一」(2010年 個展)/ギャラリーマーヤ



●「circulation」

(2004年 第5回宝塚現代美術展・店)/宝塚南口駅前サンピオラ3番館・空き店舗内

家の大黒柱に無数の穴を穿ち、循環をテーマにした作品。

—9月の学祭で催された同窓会「ホームカミングデー」を振り返って—



「先日のホームカミングデーでは、恩師をはじめ多くの同窓生や後輩たちと懐かしい再会ができました。20年前、一期生として宝塚キャンパスに入学した当初は苗木だった木々が、今では大きく枝葉を広げ、キャンパス内でたくましく成長しているのを見て、20年という歳月の重さに感動を覚えました。入学当時、私は大阪平野を一望

できる絶景の自然環境のもと、先輩不在の我々は伸び伸びと学生生活を謳歌していました。その後、後輩たちが入学し先輩としての自覚を意識し身を引き締めて作品制作に動んでいた頃が懐かしく思い出されます。卒業後、大学も新たな学部(東京メディア・コンテンツ学部および看護学部)が増設され、設備も充実し

多くの優秀な卒業生が輩出されました。これを機会に、今度は我々卒業生が相互の交流を深める場として同窓会を築き上げていかなくてはなりません。最後になりましたが、今回このような場を設けていただいた先生方をはじめ事務局の皆さま、ホール係としてお手伝い頂いた在学生諸君に感謝いたします。」

ご多忙の中、取材にご協力いただきありがとうございました。